

6月号では、ウルムチ市を紹介したい。聞いた感じでは中国の都市のように思えないが、漢字では、「烏魯木齊」と書く。別にカラスが多い所ではなく単なる音の当て字であろう。

カラスと言えば、奥地はいざ知らずどこに旅してもカラスやスズメはもとより鳥はあまり見かけない。東北3省では黒と白のツートンカラーのカササギをたまに見かける。あの七夕の夜、牽牛と織女の再会をとりもつ鳥である。尾がピンと長くスタイルはとても素晴らしい。声はカラス科の鳥であるためかあまりよくないが、なぜか中国ではその声を聞くと「喜びの前兆」と言われているらしい。ゴルフ場でたまに見かけるが、ホールインワンでもお願いしたい。ちなみに漢字では「喜鵲(シーチュエ)」と書くが、やはり「喜」の字があてはめてある。

さて話を戻すと、上海の紅橋空港から飛行機に乗るとウルムチまで約5時間かかる。西方に約4000km飛ぶのだからこのくらいかかるわけである。あと少しでウルムチかなと思いつつ窓から外を見ると眼下に真っ白く輝く山脈が見えている。友人に聞くとこれが「天山山脈」だと言う。なるほど平山郁夫画伯のあの絵画の通りである。とても迫力があり神聖な山に思われた。

ウルムチ市は、シルクロード要衝の都市として有名であるが、新疆ウイグル自治区の省都で人口は約185万人である。省・自治区としては中国最大の面積を持つ。同自治区の政治・経済・文化の中心地であり、民族はウイグル族・漢民族・カザフ族・モンゴル族など42の民族が入り交る。町を歩くと頭に白いウイグル帽をのせた人が目につき、また尖塔のある建物も散見され、中国の他の都市と異なりイスラム文化の香があちこちにただよっている。

しかし全体的には高層ビルが立ち並び、どこにでもある近代都市に変貌している。次第に漢民族文化にの

み込まれていっているように感じた。私が訪れたのは、2008年の4月末頃だったがその3ヶ月余り後、北京オリンピックが開催された。この時ウイグル族やチベット族の暴動が発生し、これに対して中国政府が武力で鎮圧したのは記憶に新しいと思う。政府の方針で漢民族をこれらの地方への移住を奨励しているのだから民族間の争いが絶えないのはあたり前であろう。

自治区といっても政治経済の主要ポストは漢民族が握っているのだから「自治区」とは名ばかりである。



国際大バザールというショッピング街

今の胡錦濤国家主席はチベット自治区の責任者だった時、チベット族への高圧的な行政を行い、その統治を評価され主席までのぼりつめたと言われている。13億の民をコントロールするには一党独裁による統治もいたし方ないのかも知れないが、発言の自由が制約される

国はやはり民主国家とはいえない。しかし一個人として見れば、どこの国でもバランスのとれた考え方をする人、素晴らしい人材も多く、国と個人を同一に見るべきではない。

さてこの地方は、年間降水量は平均200ミリ程度である。2010年の日本の夏は各地に集中豪雨があり、1時間に50ミリも降った都市も多かったが、その様な地方の1日分の雨量が年間雨量に等しくなるくらい雨の少ないところなのである。それもそのはず、このウルムチ市から東西南北どこに車で向かってても砂漠にぶつかるのである。

新疆の「疆」の字について現地ガイドは次のように説明してくれた。一は山脈を表わし、田は盆地のことだと言う。傍の一番上の一は阿爾泰(アルタイ)山脈、次の田は准噶爾(ジュンガル)盆地、次の一は天山山脈、次の田は塔里木(タリム)盆地、そして一番下の一は崑崙(クンルン)山脈を指すというのである。盆地といっても殆どは砂漠である。

この疆の字はこのようにして作られた漢字と言う

ことだが、学者に確認してはいないが、私は納得した。(漢和辞典で見るとこの字の意味は「土地の境界」とあるが以上のような説明はされていない。)関心のある方は一度世界地図をごらんになりこの地方の地形と疆の字をあわせてみていただきたい。

ウルムチの市内に入ってまず「新疆ウイグル自治区博物館」を見学した。ウイグル各地の民族の紹介と古代の出土品の2部門に分かれているが、ここで日本でも東京の博物館で展示されたことがある有名な「楼蘭の美女」のミイラを見た。この地方は乾燥しているので各地でミイラが出てくるようだ。美女といっても生前の美しさは想像すら出来ないが、できることなら生前の姿を見たいものである。またこの地方は品質のいい玉がとれることでも有名で中でも和田(ホータンと読むそうだ)の白玉はすばらしい。いいものはダイヤモンドと同じくらい高価なものもある。博物館内に売店がありそこで玉でつくったアクセサリーをいろいろ売っていた。

ここを後にして次に国際大バザールというショッピング街を散策。ウイグル族の衣料品や食品が豊富に置かれている。このバザールを見ていると中国というより、行ったことは無いが、イランやイラクあたりにいるような錯覚を起すほどだ。しかし建物の中に入ると治安上も問題が出てくるとガイドが言うので程ほどにして切りあげた。

ホテルにつきゆっくりと食事をとり、夜8時ころレストランを出たが、外をよく見るとまだ明るいのに驚いた。この地方は9時を過ぎないと暗くなっていけないのである。前述したように上海からさらに4000km西にあるのだから日が暮れるのが遅いのはあたりまえだ。にも拘らずあの広大な中国で、国として正式に決められている時刻は北京時間1つしかないのである。しかしやはり生活しにくいためかどうか知らないが、ウルムチは独自の時間を設定し北京に対し^{マイナス}2時間の時差を設けている。旅行される時は北京時間なのかウルムチ時間なのか念のため確認した方がよい。

翌日、ウルムチ市の北東約100kmのところにある「天池」に向かった。朝8時にバスが出発したが途中から道路は舗装されておらず、凸凹道が続く。バスは常に左右に揺れ、時折とびあがるほど揺れたりした。3



天池の前で記念撮影

時間半も揺られ続けて、ようやくバスから降りた時はホッとした。そこから坂道をどのくらい歩いたであろうか、急に眼前に別世界が広がった。それは「神の池」とも「天の鏡」とも呼ばれる青く澄んだ神秘的湖である。なるほど天の池と命名するはずだと思った。

湖のずっと向こうに標高5445mのボゴタ峰という高山の頂がそびえているが、この天池はその中腹1980mのところを抱かれているのだという。ここには伝説があり、西王母という神様が鏡に使った湖だったという。湖面は約5km²で最も深いところで105mある。私が訪れた時は4月末というのに湖の周辺は雪と氷がかなり残っていて、見るからに冷たそうであった。湖畔には遊牧民族の家であるパオに似た家がたくさんあり、我々はその一軒を訪問した。お菓子やミルクティ(羊乳)やシシカバブをごちそうになり、通訳を通して家の人とお話することができたが、とても皆さん親切で親近感を持った。

中国という国の広さは日本の26倍もあり、各地方それぞれの文化、習慣、風景がある。ウルムチやそのあと訪問した吐魯番(トルファン)や敦煌のような場所は日本にはもちろんないが、中国国内でも独得の素晴らしさがある地域である。独自の文化や言語等を持つ地域を漢民族文化で混ぜ合わせないで欲しいと思いつつ旅を続けた。